

小学校課程における言語表現授業の一考察

——「聞く」力、「話す」力を育てるには——

千 古 利 恵 子 中 條 敦 仁

はじめに

近年、自分の気持ち、考えを相手に伝えられない子どもが増えているとの指摘がよくなされている。このことに対して、コミュニケーション能力の低下に伴う問題として論じられることが多い。しかし、携帯電話、電子メールなどのコミュニケーションツールを使った子どもたちのコミュニケーション能力は非常に高いと言える。たとえば、絵文字や顔文字だけで心情を伝えたり、新たな文字を作り会話したりと、そのバリエーションは豊富である。

にもかかわらず、教育現場において、なぜコミュニケーション能力が低下していると言われる、問題とされているのであろうか。また、その問題に対して国語の授業はどう対処していけばいいのか、考えてみる。

1. 教育現場の考えるコミュニケーション能力とは

コミュニケーション能力育成に関わる重要な教科として「国語」があげられる。教科「国語」は、生活に関わる基本的な「読む」「書く」「聞く」「話す」の4つの能力養成を柱としている。小学1、2年生ではまだ十分とは言えないが、この年齢の児童にもこの4つの能力がないわけではない。マンガ本であれば小さい頃からしっかりと読んでいる。教育実習を終えた学生の報

告によれば、幼稚園の年長組の中には、携帯電話のメールが読み取れる子どもさえいるようだ。小学生にもなると、友達と携帯メールで文字のやり取りをし、それなりに文章を書いている。テレビでアニメ番組を見て主人公のことばをしっかりと聞き、大人以上にその内容を理解している。次の日は友達同士、前日に見たアニメの話を楽しんでいる。生活に関わる基本的な「読む」「書く」「聞く」「話す」という作業を、子どもはその発達段階に応じて、子どもなりにこなしているといえる。

だが、それは教師や保護者が求めている「読む」「書く」「聞く」「話す」能力でない。教師や保護者が求めているものは、これから大人になっていくために必要な能力、社会人として生きていくために必要な能力であり、子どもとして生きるために必要な能力ではないのである。即ち、社会人に必要なコミュニケーション能力なのである。教師は、子どもが既に獲得している「読む」「書く」「聞く」「話す」能力と、教育によって育成しようとする「コミュニケーション能力」との違いを認識することが必要だろう。

2. 小学校学習指導要領の国語の目標

「言葉の教育はなるべく幼い頃から」というのを聞くと、社会人に必要なコミュニケーション能力の基盤作りは小学校時代に行うべきだと思う。そうであれば、小学校の国語の授業の果たすべき役割は大きい。重大な役目を担う国語

教育は学習指導要領に従って行われる。小学校学習指導要領の国語の目標はどのようなものか、次に掲出する。

国語を適切に表現し正確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力や想像力及び言語感覚を養い、国語に対する関心を深め国語を尊重する態度を育てる。

この目標をみると、教育現場が求めているコミュニケーション能力は次の5つである。

- ① 自分の思考を的確に文章化できるか。
- ② 他人の述べていることを的確に読み取れるか。
- ③ 他人の話を聞き、自分の気持ちを伝えられるか。
- ④ 独自の思考力、想像力を持てるか。
- ⑤ 日本人として日本語を正しく運用できるか。

指導要領を読むかぎりでは、教育現場は、私的な子どもとして生きるために必要な能力ではなく、日本人として、社会人として必要な能力をつけさせるための基礎的能力を身につけさせるために、国語の目標を設定している。

今後、ますます国際化の流れが加速し、子どもたちはその流れの中に生きていくことになる。個人レベルでも、様々な情報を日本から世界に発信していくこともますます増えるであろう。その時に、まず必要なことは、自国のことば、文化を認識していることである。そのために、小学校課程において、日本のことばを正しく習得することが大切だと考えられているのである。

現行の「国語の目標」の課題は、私的な子どもとして生きるために必要な能力の育成にウェイトが置かれていないことだろう。我が国も、

今後、個人レベルでの国際交流はさらに進む。その時代を生きぬく社会人を育てるには、小学生には「私的な子どもとして生きるために必要な能力」の育成にも目を向ける必要があるのではないだろうか。

3. 小学校課程の国語授業の役割

小学校の国語の授業の役割は大きい。先に示した指導要領の説く通り、人間の営みの根幹をなす言語表現能力を、子どもが獲得していくための基本となる教科が国語である。現在の国語教育はこの役割を果たしているのか。残念ながら実現には遠いようだ。言語表現能力の骨幹が「読む」「書く」「聞く」「話す」であり、それを育てるはずの教科国語が、その役割を果たしきれないでいることが、なぜそれほど重大な問題になっているのか。

「読む」「書く」「聞く」「話す」の4つの能力の向上は、論理的思考、想像力の獲得につながる、と屡々言われる。なるほど、我々は、評論的文章を読解するとき思考し、その内容を解釈しようとする。その過程には、論理的思考が必要となる。一方、我々は、小説・物語的文章を読むとき、場面、主人公の様子、気持ちの変化、自分の経験との比較など、多くの想像を巡らす。確かに、小説や物語的文章を読む過程には、想像力を働かす必要がある。国語の教材として論理的文章と小説・物語的文章が収録されているのも、この点からは納得出来る。

高校卒業後さらに進学を考える場合、高校生の多くは、文系と理系とにわかれ、大学受験に備える。文系は国語、理系は数学・理科を重点的に学習するというイメージが強いが、数学の問題を解く論理的思考を獲得できれば、国語の文章を読解することができ、逆に文章を論理的

に読解する力を獲得できれば、数学の問題を解くための力となると、国語教育に携わった経験から稿者は考えている。では、想像力の育成はなぜ必要か。新たなものを作り出す創造力の基本に想像力・空想力があるといわれる。創造力を失った社会人が増えれば社会の発展は望めないだろう。想像力・空想力の備わっていない社会人に創造力を発揮せよと言っても、それは難しい。自分を取り巻く世界の不思議さに昂揚できる子どもの頃にこそ、想像力・空想力は育つに違いない。従って、想像力・空想力は幼い子ども時代に養うことが重要で、そうすることにより、人間は個々の発達段階に従いながら、より発展的に思考する能力を成長させていくのである。このような点からも、論理的思考・想像力の獲得が「読む」「書く」「聞く」「話す」の4つの能力の向上と強く結びついていることは、肯けよう。

小学校課程の国語の授業をおろそかにしてしまうと、生きる力の未発達だけでなく、思考力の発達にも大きな影響を及ぼすと考える。小学校課程の国語授業は、人間成長過程の出発段階として、大きな役割を担っている、と言っても過言ではないのである。

4. 指導上の問題点

現状、小学校の国語は指導上で大きな問題を抱えている。それは、近年特に重視されている「聞く」「話す」力をどのような方法で身につけさせるかということである。冒頭にも記したように、自分の気持ち、考えを相手に伝えられない子どもが増えているといわれる。自分のことばで気持ちをどう表現したらいいのか、どう他人に伝えたらいいのか、その方法が身につけていない子どもが増えているのである。親が共働

きで会話が少ない、少子化により一人っ子が増え家庭での兄弟・姉妹の会話がないう、インターネットや電子メールの発達により音声による会話機会が減っているなど、多くの要素が複雑にからみあい、他人とどう接触していいのか、どう話したらいいのかがわからなくなっていることが原因だとする分析は多い。

このような分析結果からも、現在、小学校の国語の授業で「聞く」「話す」力の育成が重要視されているのである。問題は、その能力を育成するための方法がはっきりとしていないところにある。

これまで国語の授業においては「読む」「書く」の能力育成に力が注がれ、「聞く」「話す」ことはそれ程重視されてこなかった。「読む」「書く」力を、子どもたちにつけるための方法は、諸先生方の理論や実践例が報告され、多くのデータが蓄積されてきた。しかし、「話す」「聞く」力をつけるための理論や実践例は、先に比べて乏しい。今後多くの理論や実践の報告がなされ、データを蓄積していくことが急務である。

「読む」「書く」の指導に比べ、「話す」「聞く」の指導は大変に難しい。「読む」場合には、文字が媒体になることで、再読は無限に可能となり、確認しながらの読み進めが許される、自己の考えを客観的に検証できる。「書く」場合も同じことが言える。が、「聞く」場合は、音声は媒体となるため、基本的にはその場で相手の主張は消え、聞き直しができない。音声をキャッチした瞬間、聞き手は何らかの判断をしなければならない。「話す」場合も、話し手が音声をキャッチした瞬間、何らかの判断をしなければならない、という点では「聞く」場合と同じだといえる。ただ、話し手がキャッチする音声は2種類ある。話して自らの発する音声、も

う一つは聞き手から発せられる音声である。この2種類の音声を同時に判断することから、全く「同じ」と言い切れないのだが。これについては、稿をあらため考察する。「話す」「聞く」の指導には、次の視点が重要であろう。

- ①できる限り一度で相手に伝わるように、
- ②わかりやすく、体系的に、
- ③音声以外のしぐさ・表情など非言語を媒体として活用出来るように、

上手く「話す」ことができるには、また「聞く」聞くことができるようになるには、私たちはあらゆる方法を用いて伝えるための努力が必要なのだ、と分からせることから指導は始めたい。だが、小学生の「分かる」は知識としての理解ではない。体感して初めて「分かる」という段階であるから、その指導法の確立は難しい。①～③の技術を小学生にいかに教え、いかに実践させればいいのかであろうか。

5. 「聞く」「話す」力を向上させる方法

実際に授業で行える方法をいくつか示してみたい。ここでいう、「聞く」力とは、相手の発した音声を認識し、その内容を理解し、返答するための考えが持てる力を指し、「話す」力とは、自分の考え、気持ちを音声により伝える力を指す。

方法1 「自己紹介」

人が集まると、相手のことが知りたくなる。小学校においても、新入生の時、新学期クラス替えが行われたとき、自己紹介が行われる。これは、人間関係を構築する第一歩となる。「自己紹介をしてください」とだけ伝え、自己紹介を始めると、たいてい氏名と「お願いします」

ということばだけで済ませ、単なる情報伝達のみで終わってしまう。この状況を回避できれば自己紹介は「話す」力、「聞く」力を育てるための手段として有効である。まず、国語の時間に、自己紹介文を書かせる。教師は、学年に応じて、必要項目を設定し、それら項目に対して原稿を作るよう促す。たとえば、低学年であれば、氏名、好きな食べ物、嫌いな食べ物、好きなアニメやキャラクターなどを項目にし、原稿を作らせ、その上で、みんなの前で、自己紹介をさせる。さらに、聞き手側の子どもには、後でクイズ形式の問題を出す旨を伝え、集中して聞かせる。問題例としては「A君の好きな食べ物は何だった?」、「くまのプーさんが好きな人は誰だったかな?」などである。

このような自己紹介をすることにより、文章を書くというだけでなく、人前で話すこと、順序立てて話す経験をさせることにより、話す力が向上し、さらに、聞く力も向上するのではない。

方法2 「伝言ゲーム」

伝言ゲームは、周知の通り相手の言ったことを正確に聞き取り、記憶し、次に伝えるものである。その過程で、聞く力、記憶する力、そして話す力が要求される。聞く力、記憶する力の向上とともに、話す力の向上も期待できる。伝える相手は1人であっても、話すことに変わりはないからである。また、ゲーム性が高く、小学生にとって楽しく取り組むことができ、その点でも、有効な手段と言える。だが、授業に取り入れるためには十分な授業計画が必要である。特に低学年の場合は、ゲームを楽しむという状況に陥ると、修正は難しいだろう。

方法3 「朗読」

近年、日本語が注目され、多くの朗読CDが発売され、朗読会も多く開催されるようになってきている。小学校においては、教科書に掲載された作品を音読することから始める。ただ、音読と朗読では、質が違う。音読が、単に書いてあることを声に出して読むことであるのに対し、朗読は、感情を込めて音読することである。朗読には「感情」が込められる。この「感情」は登場人物の気持ちを表すだけでなく、自分がその作品をどう伝えたいかという感情も含まれると考える。感情を込めて読めば、聞く側もその内容に引き込まれやすくなる。

具体的な方法としては、低学年では、チームでの取り組みが良いのではないか。小説や物語を教材とし、いくつかのチームを作り、各チームで、登場人物ごとに子どもをキャスティングし、それぞれの人物のこと、どのようにセリフを言えいいかなどを考えさせ、チーム発表の形式で、授業を進める。発表チーム以外は、発表チームのよかったところ、悪かったところを考えさせ、評価をさせる。

国語の授業は、特に低学年の場合は、教師が教材を音読しつつ授業を進める方が授業効果は高いかもしれない。しかし、3年生にもなれば、単なる音読ではなく、チームでの役割分担を行い、朗読をさせることによって教材への関心を高められるだろう。朗読することの楽しさを教えることにより、話す力の向上だけでなく、聞く力も向上し、有効な方法である。

方法4「暗唱」

暗唱は、他人に聞いてもらうことを前提とするため、自発的に人前で話す力が要求される。また、記憶したものを棒読みするのではなく、声の抑揚、感情なども込めて読まなければ聞き手に伝わらない。記憶したものを、どのように

伝えれば、その内容が相手に伝わるかを考えさせながら暗唱させることにより、話す力を向上させることができる。

対象が小学生であるから、暗唱のための文章はそれほど長くなくてよい。例えば、低学年なら、20～40字程度の短文、高学年であれば、『方丈記』や『徒然草』などの古文の有名な冒頭部分を暗唱させてもよいであろう。

高等学校の中には保育所での体験実習の準備として、「素読」のために絵本を暗唱させているところもあり、「暗唱」の教育効果も見直されているようだ。字数や内容を吟味すれば、小学校過程からの取り組みは十分可能だといえる。「暗唱」を強制し、文章に対する興味の消失、嫌悪にならぬよう配慮が必要である。子どもたちに暗唱したい文章を選ばせるのも一案ではないか。

方法5「1分間スピーチ」

人前でスピーチすることは、大人にとっても難しいことである。大人は人前で話すことの難しさ、恥ずかしさ、伝えることの困難さがあることなど、負のイメージを多く持ってしまうことから、極端にスピーチを避けたがる人も多い。そのような人であっても、小学生の頃から繰り返しスピーチをおこない、慣れていかなら、スピーチに対する負のイメージを抱かなくなっていたに違いない。その結果、現在の話す能力は言うまでもなく、将来的にもその話す力は向上していくと考えられるのではないか。

毎朝、朝の会（ホームルーム）の時間に、数人の担当者が、1分間のスピーチをする。30人学級であれば、1日3人、2週間（10日間）で30人全員がスピーチできる。これを繰り返しおこなっていく。低学年では、毎回スピーチの課題（「おもしろかったアニメ」など、ごく簡単

なものでよい)を示しておき、それに従って、内容を考えさせる。また、事前に保護者にも1分間スピーチをおこなう旨の連絡をしておき、内容を一緒に考えてもらうことをしてもよいのではないか。高学年なれば、できる限り課題は設定せず、聞いてもらいたいことなどを自ら考えさせるほうがよい。ただ、課題がないとうまくいかない場合は、社会の授業範囲に見合った、社会問題に関する課題を示すとよい。

この方法の問題点は、どうしても人前で、一人で話せない児童にどのように対応するかである。「一人で」「1分間」ということに教員がこだわりすぎないことがこの方法の前提でなければいけない。

方法6「討論会」

討論は他人の意見を聞き、自分の意見を相手に伝え、また、第三者として両者の意見を判断するなど、「聞く」「話す」力をフルに活用しなければならない。「聞く」「話す」力を向上させる最もよい方法といえる。ただ、授業で討論会をしても、年齢にかかわらず、時に、言い合い、けんかあい、最悪の場合、けんかが始まってしまふことがある。小学生の場合、このような状況になるのは、当然と言えば当然である。小学生にとっては、自分の言いたいことを相手にぶつける点で、討論もけんかも同じに感じてしまうのである(大人に対しても同じことが言えるのではあるが…)。初めは、単なる言い合いになることも多々あるであろうが、教師が全体を見回し、けんかになる前に間に入り、意見の違いを認め合い、考えあう状況をうまく作り出し、討論とは何かを根気よく伝えていくことが討論会成功の鍵となる。

討論のテーマに関しては、まず、身近なことから始め、学年を追うごとに、社会問題に発展

させていくことが効果的である。学年を追うに従い、児童一人一人の発達に差が生じてくる。それは、興味・関心の範囲やレベルの違いに通じる。クラスの児童一人一人の知的欲求の実態を把握していなければ、マイナスの効果しかでない。討論に参加出来ない児童には「聞く」「話す」は「苦痛なこと」というイメージを定着させかねない。

以上、6例示してみたが、何よりも、授業を中心に、低学年からできる限り人前で話す機会を与え、人前で話すことに対する違和感、嫌悪感など、負のイメージを持たさないようにすることが大切である。さらに、各方法の中に指摘したように、小学校入学時、すでに人前で話すことが苦手な子ども、それ以前に人前に立つことすら苦手な子どもがいる。そのような子どもたちを無理に話しの場に引っ張り出すことは、逆効果となる。小学校課程の教科国語の授業の役割は、むしろ、このような子どもの「聞く」「話す」能力をどのように育成するかということだろう。「聞く」「話す」ことの苦手な児童の存在も視野に入れながら彼らが社会人となった時に必要となるコミュニケーション能力の基礎力を高めるための授業方法を確立していくことが重要である。

5. 「聞く」「話す」力を向上させるために教師が配慮することは

「聞く」「話す」力を向上させる方法をいくつか示してみたが、より効果をあげるためには、教師の細やかな配慮が欠かせない。

より効果をあげるために、次のようなことを教師が心がけるとよいのではないか。

①授業に限らず、できる限り話す機会を作

ること。

②学校に限らず、家庭でもできる限り話す機会を作ってもらうよう、保護者に働きかけをすること。

③教師・保護者がじっくりと話を聞く時間を作ること。

④教室で発言をする時に、みんながその発言者のことばをじっくり聞くことができる雰囲気、環境を作ること。

⑤発表に対して、お互いに評価しあうこと。

⑥人に話たくなるような体験をさせること。

①②は、何よりも必要なことで、あらゆる場面で話す機会を作ること、「話す」力を向上させるための要素としてもっとも大切である。他人と話す機会が増えれば、おのずと聞く機会も増えるものである。③④⑤について、聞いてくれる人がいなければ、話していてもつまらない。じっくり聞いてくれる人がいれば、話す側もさらに話したくなる。特に、小学生は大人に自分の思い、考えを聞いて欲しいことが多いようである。教師としては、初めから大人の意見・考え方を押し付けるのではなく、まずじっくりと子どもの考え、意見を聞くことから始めることが大切である。さらに、子ども同士が聞きあう環境を整えることも教師の大切な仕事である。いくらすばらしい朗読、スピーチをしていても、同じクラスの友達が聞いていてくれないければ、それだけで発表者のやる気がそがれてしまうのである。話す機会を多く、じっくり聞いてもらえる環境が整っていれば、より話しやすくなり、話す意欲もアップすると考えられる。話したことを聞いてもらえる、人の話を聞いてさらに意見する。この行動の繰り返しこそ、大切である。

さらに、子どもは、自分の行動に対して評価

されることを望むことが多い。よって⑤に示した相互評価は重要である。特に良い評価を得た後の行動は大きく変わり、良い方向へと進んでいくことが多い。また、お互いを評価することにより、良いこと悪いことの判断力も付いていく。

⑥について、人間は何かこれまでに未体験ことに触れると、そのことを他人に話したい、聞いて欲しいという強い衝動に駆られる。子どもも同じで、学校での出来事、習ったこと、これまでに未体験のものに触れたとき、保護者や教師に一生懸命話す。人に伝えたいと思うような衝撃的・刺激的な体験を1つでも多く与えることは、「話す」力向上の一助となるのではなかろうか。

子どもに衝撃・刺激的な体験を与え、その経験を話す機会を与え、さらにじっくり聞く環境、話し合える環境を与えることが教師の配慮すべきことであり、結果、「聞く」「話す」力が向上していくとともに、他者との円滑なコミュニケーションをおこなうための能力向上にもつながっていくのである。

おわりに

小学校過程において、どのように「聞く」力、「話す」力を向上させればよいのか、その方法と教師の配慮を中心に述べた。人と人とのつながりが希薄になってきている現状を考えると、今後、人間関係が大きく変容する可能性がある。例えば、インターネット、電子メールなどのさらなる発展により、音声表現を伴わない人間関係が中心となる時代が到来するかもしれない。しかし、より深い人間関係を構築するためには、対面による会話は大切である。やはり、次世代に必要なことは、いままで以上の会話力、コミ

コミュニケーション力である，といえよう。何より我々自身，国際化が叫ばれるこの現代をいかに生きるべきかと考えても，同じく会話力，コミュニケーション力の向上が必要であることが分かる。それらのことを考え合わせると，小学校課程における「聞く」「話す」を中心として言語表現授業は今後益々重要になり，おろそかに

してはならない。教師はそのことを考え，単発的ではなく，6年間トータルで継続的な指導をおこない，子どもたちが表現技術・能力を確実に積み上げていけるような授業構成をしていくことが教科「国語」の授業のあり方だと考えるのである。